

し き し
志 木 市 遺 跡 群

Ⅶ

1 9 9 6

埼玉県志木市教育委員会



城山遺跡出土の須恵器

はじめに

志木市教育委員会
教育長 秋山太藏

本書は、平成6年度に実施しました市内の個人専用住宅建設に伴う発掘調査の成果を調査報告書としてまとめたものです。

これらの調査では、西原大塚遺跡の弥生時代の住居跡、中道遺跡の古墳時代後期の住居跡などから多くの遺物が出土したことにより、また新たに志木市の歴史を紐解く上で貴重な資料となることと切に期待しております。

現在、志木市における埋蔵文化財包蔵地は、平成5年度に新規に登録された大原遺跡を加え、現在市内に16ヶ所をかぞえます。

本来、これらの貴重な文化財は現状のまま後世に伝えるのが望ましいのですが、土木工事等で現状保存が困難な場合は、代替措置として記録保存のための発掘調査を行うことになっております。

しかし、事業者が個人であって、その者が専用に用いる住宅建設などは、発掘調査の費用負担などについて、困難な問題がありました。そのため、昭和62年度からは国庫及び県費の補助金の交付を受けて調査を進めております。

平成6年度は、確認調査・発掘調査を併せ、32ヶ所の調査を実施しました。その中で実に21ヶ所が個人専用住宅建設によるものということは、今後の小規模開発への迅速な対応に本腰を入れて考えていきたいと思っております。

最後になりましたが、本書の刊行にあたり、文化庁・埼玉県教育委員会ならびに地元の多くの方々のご指導に深く感謝するとともに、本書を郷土の歴史研究のために広く活用して頂ければ幸いです。

例 言

1. 本書は、埼玉県志木市内に所在する遺跡群の、平成6年度の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査及び整理作業は、志木市教育委員会が主体となり、国庫及び県費の補助金の交付を受け、平成6年4月1日より平成7年3月31日まで実施した。
3. 本書の作成は、志木市教育委員会が行い、編集は尾形則敏が担当した。また、執筆は下記のように分担したが、それ以外は尾形が執筆した。

第2章 佐々木保俊 第3章～第6章第2節 検出された遺構 深井恵子

4. 挿図版の作成は、深井・太田敦子が行った。
5. 遺物の実測は、星野恵美子が行い、遺構・遺物のトレースは深井が行った。ただし、西原大塚遺跡第32地点の出土遺物については、斑目ちひろが実測を行い、佐々木がトレースを行った。
6. 本書の遺構・遺物の挿図版の指示は、以下のとおりである。

○挿図版の縮尺は、それぞれに明記した。

○遺構挿図版中の水系レベルは、海拔標高を示す。

○ピット・掘り込み内の数値は、床面もしくは確認面からの深さを示し、単位はcmである。また同一遺構内にあるピットでも、おそらく後世のピットと思われるものについては、ピット番号(P)を示し、周辺で最も安定した遺構確認面からの深さとして換算し、計測表に表示した。

○遺構挿図版中のドットは遺物出土位置を示し、その番号は遺物挿図版中の遺物番号と一致する。

○遺構の略記号は、以下のとおりである。

Y=弥生時代住居跡 H=古墳時代住居跡 D=土坑 M=溝跡

○遺物挿図版中、土器に塗布された赤色顔料の範囲は、網点スクリーントーンによって示す。

7. 調査組織

調査主体者 志木市教育委員会

担当課 生涯学習課

教 育 長 秋山 太蔵

教 育 総 務 部 長 星野昭次郎 (～平成7年3月31日)

川目 憲夫 (平成7年4月1日～)

教育総務部専事生涯学習課長 並木 勝司

生涯学習課長補佐 山中 満 (平成7年3月31日)

尾崎 健一 (平成7年4月1日～)

文化財保護係長 岡本 孝

文化財保護係主査 佐々木保俊

文化財保護係主任 尾形 則敏

文化財保護係主事 今野 美香

文化財保護係主事補 藤澤 品子 (平成7年4月1日～)

志本市文化財保護委員会（5名）

神山健吉（委員長）・井上国夫（副委員長）・尾崎征男・高橋長治・高橋 正

8. 発掘調査及び整理作業参加者

西原大塚遺跡第32地点（調査担当者 佐々木保俊）

発掘協力員 木村千枝子・吉谷顯子・高橋恭子・高倉光代・塚田和枝・中村マキ子・
二階堂美知子・原島千香子・広沢奈津子・藤森 栄・古田トシ子・油橋由美

中道遺跡第33地点（調査担当者 尾形則敏）

発掘調査員 深井恵子

発掘協力員 阿部公子・高橋恭子・竹内美代子・塚田和枝・成田しのぶ・森 文子

城山遺跡第25地点（調査担当者 尾形則敏）

発掘調査員 深井恵子

発掘協力員 阿部公子・太平裕子・鈴木美佐江・須藤京子・高橋恭子・塚田和枝・
二階堂美知子・星野恵美子・森 文子

田子山遺跡第32地点（調査担当者 尾形則敏）

発掘調査員 深井恵子

発掘協力員 阿部公子・鎌本あけみ・高橋恭子・高倉光代・塚田和枝・二階堂美知子・
広沢奈津子・松浦恵子・森 文子

田子山遺跡第37地点（調査担当者 尾形則敏）

発掘調査員 深井恵子

発掘協力員 足立裕子・岩森 都・太田敦子・鎌本あけみ・鈴木百合香・二階堂美知子・
藤森 栄・星野恵美子・松浦恵子・丸山恵美子・森 文子・油橋由美

整理作業

深井恵子・太田敦子・鎌本あけみ・高田美智子・星野恵美子・松浦恵子・丸山恵美子
斑目ちひろ・東浦久美子

9. 各遺跡の発掘調査及び整理作業・報告書作成には、以下の諸機関・諸氏のご教示・ご援助を賜った。記して感謝する次第である（敬称略）。

埼玉県教育庁生涯学習部文化財保護課・埼玉県立博物館・埼玉県立歴史資料館・埼玉県立さきたま資料館・志本市立郷土資料館・志本市立志木第三小学校・志本市立宗岡小学校

西原大塚遺跡第32地点（開発主体者 個人） 中道遺跡第33地点（開発主体者 個人）

城山遺跡第25地点（開発主体者 個人） 田子山遺跡第32地点（開発主体者 個人）

田子山遺跡第37地点（開発主体者 個人）

浅野晴樹・麻生 優・荒井幹夫・石井 寛・飯田充晴・井上洋一・梅沢太久夫・岡田威夫・
岡本東三・片平雅俊・倉沢和子・栗島義明・小出輝雄・肥沼正和・小滝 勉・小宮恒雄・
笹森健一・斯波 治・白石清之・実川順一・鈴木一郎・鈴木加津子・鈴木正博・鈴木重信・
高橋 学・田代 隆・田中英司・田中広明・照林敏郎・中島岐視生・中村倉司・並木 隆・
根本 靖・野沢 均・早坂廣人・藤波啓容・松本 完・松本富雄・柳井章宏・和田晋治

目 次

はじめに

例 言

目 次

図版目次

挿図目次

第1章 平成6年度調査成果の概要	1
第1節 調査に至る経過	1
第2節 調査成果の概要	3
第2章 西原大塚遺跡第32地点の調査	7
第1節 遺跡の概要	7
第2節 検出された遺構と遺物	8
第3章 中道遺跡第33地点の調査	12
第1節 遺跡の概要	12
第2節 検出された遺構と遺物	13
第4章 城山遺跡第25地点の調査	20
第1節 遺跡の概要	20
第2節 検出された遺構と遺物	21
第5章 田子山遺跡第32地点の調査	26
第1節 遺跡の概要	26
第2節 検出された遺構と遺物	27
第6章 田子山遺跡第37地点の調査	32
第1節 遺跡の概要	32
第2節 検出された遺構と遺物	32
第7章 まとめ	36

図版目次

図版 1	西原大塚遺跡第32地点	(上) 発掘調査風景 (下) 45・47号住居跡
図版 2	◇	45・47号住居跡出土遺物
図版 3	中道遺跡第33地点	(上) 調査区近景 (下) 発掘調査風景
図版 4	◇	17号住居跡
図版 5	◇	17号住居跡遺物出土状態
図版 6	◇	17号住居跡出土遺物
図版 7	城山遺跡第25地点	(上) 調査区全景 (下) 88号土坑
図版 8	◇	104号住居跡・88・89号土坑出土遺物
図版 9	田子山遺跡第32地点	(上) 調査区全景 (下) 1号方形周溝墓
図版10	◇	183号土坑・遺構外出土遺物
図版11	田子山遺跡第37地点	(上) 調査区近景 (下) 196・197号土坑
図版12	◇	196号土坑・遺構外出土遺物

挿 図 目 次

第1図	志木市の発掘調査件数の推移	1
第2図	市域の地形と調査地点 (1/20000)	5
第3図	周辺の地形と調査地点 (1/5000)	7
第4図	遺構分布図 (1/300)	8
第5図	45・47号住居跡 (1/60)	9
第6図	45・47号住居跡出土遺物 1 (1/4)	10
第7図	45・47号住居跡出土遺物 2 (1/3)	10
第8図	周辺の地形と調査地点 (1/5000)	12
第9図	遺構分布図 (1/300)	13
第10図	17号住居跡 (1/60)	14
第11図	17号住居跡カマド (1/30)	15
第12図	17号住居跡遺物出土状態 (1/60)	16
第13図	17号住居跡出土遺物 1 (1/4)	17
第14図	17号住居跡出土遺物 2 (1/4)	18
第15図	17号住居跡出土遺物 3 (1/3)	18
第16図	周辺の地形と調査地点 (1/5000)	20
第17図	遺構分布図 (1/300)	21
第18図	104号住居跡・89号土坑 (1/60)	22
第19図	88号土坑 (1/60)	23
第20図	22号溝跡 (1/60)	24
第21図	住居跡・土坑出土遺物 (1/4)	25
第22図	周辺の地形と調査地点 (1/5000)	26
第23図	遺構分布図 (1/300)	27
第24図	1号方形周溝墓 (1/60)	28
第25図	183号土坑 (1/60)	28
第26図	6号溝跡 (1/60)	29
第27図	183号土坑・遺構外出土遺物 (1/3)	30
第28図	遺構分布図 (1/300)	32
第29図	196・197号土坑 (1/60)	33
第30図	196号土坑出土遺物 (1/4)	34
第31図	遺構外出土遺物 (1/3)	34

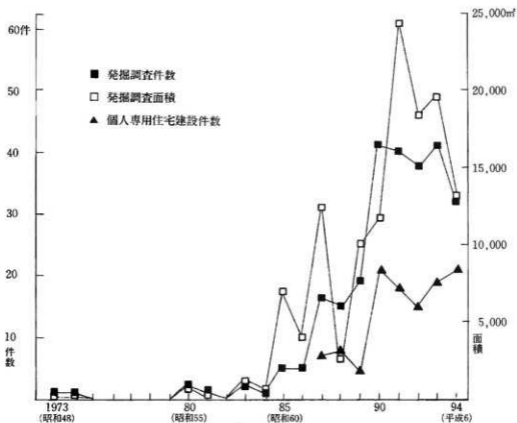
第1章 平成6年度調査成果の概要

第1節 調査に至る経過

志木市は、埼玉県の南部に位置し、市域はおおよそ南北4.2km、東西4.4kmの広がりを持ち、面積は9.07km²を測る。地理的景観を眺めて見ると、市域東部の宗岡地区には、荒川（旧入間川）の形成した沖積低地が大きく広がり、市域西部の本町・柏町・幸町地区は古多摩川によって形成された武蔵野台地の上にある。また、河川は荒川が市域東部を南東流し、新河岸川が市域北部から北西流し、柳瀬川が市域西部から中央部にかけて北東流し、新河岸川と合流する。

こうした自然環境の下、西原大塚遺跡をはじめ市域の大部分の遺跡は、柳瀬川・新河岸川右岸流域の台地縁辺部に帯状に存在している。

当市は、郡心から25km圏内に位置し、東武東上線志木駅一池袋駅間を急行で20分ほどというように交通の便にも恵まれ、郡心近郊のベッドタウンとして、昭和40年前後から急激に人口増加の経過をみせてきた。最近では営団有楽町線乗り入れが開始し、この傾向がますます顕著になってきてい



第1図 志木市の発掘調査件数の推移(確認調査を含む)

る。これに伴い、各種の開発行為も増大してきたが、とりわけ住宅建設の占める割合が高く小規模開発による遺跡破壊が進行する状況にある。また、遺跡の集中する志木市本町・柏町・幸町地区は市街化の最も激しい地域になっている現状も遺跡破壊の事態を一層大きくしていると言える。

こうした状況の中、志木市教育委員会では文化財行政を遂行していく上で、埋蔵文化財を保護・保存していくことが重要な課題となっているが、これに対しては主に記録保存という処置によって対処しているのが現状である。

第1図は、志木市における発掘調査件数及び面積の推移を表したものである。志木市では、1973（昭和48）年に第1回目の発掘調査が実施された。そして以後、1982（昭和57）年まで志木市史編さん事業に伴う発掘調査が単発に実施されていた。1983（昭和58）年には、初めて志木市において遺跡調査会が組織され、1985（昭和60）年には城山遺跡第1地点の調査が志木市遺跡調査会により実施された。この調査は、市内における発掘調査体制の本格的組織化の契機となり、以降志木市の埋蔵文化財保護を推進する上で発展的な転換となったと言える。

また、当市における開発行為、特に住宅建設については小規模のものが多く、こうした小規模の開発にも対応することも必至であった。しかし、その中で開発当事者が個人で、その個人が専用に使用する住宅の建設についての記録保存の実施については、費用の負担など困難な点が多かった。そのため、1987（昭和62）年からは、国・県よりの補助金の交付を受け、志木市教育委員会を主体として、発掘調査を開始し、こうした深刻な事態に対応してきている。さらに、民間・公共事業を問わず確認調査については、すべて公費で対応し、開発事業者の負担軽減と埋蔵文化財包蔵地の詳細な分布状況の把握を積極的に遂行している。第1図で発掘調査件数及び面積が、1987（昭和62）年以降急激に増加しているのは以上の理由である。

最近では、人口増加が始まった頃に建設された個人住宅の建て替えも多くなってきており、平成2年度以来、個人住宅建設に伴う調査件数は、共同住宅を2位におさえ、首位に浮上してきた。

平成6年度は、32地点の調査を実施した。そのうち、志木市教育委員会が実施した発掘調査は、5地点で、志木市遺跡調査会が実施した発掘調査は5地点である。

工事内容の内訳件数は、個人専用住宅21件、共同住宅6件、店舗併用住宅2件、区画整理事業1件、事務所建設1件、公共事業代替地1件である。

第2節 調査成果の概要

番号	調査地点	所在地	面積 m ²	調査期間	備 考
1	西原大塚遺跡 (区画整理事業)	幸町3丁目 3098他6筆	3,835.00	平成6年 2月17日～ 現在調査進行中	平成5年度からの継続事業 発掘調査は志木市遺跡調査会が実施
2	田子山遺跡 第31地点	本町2丁目 1697、1699	2,944.95	3月29日～ 10月18日	平成5年度からの継続事業 発掘調査は志木市遺跡調査会が実施
3	西原大塚遺跡 第32地点	幸町3丁目 3133-9	60.11	4月6日～ 4月13日	確認調査は4月5日に実施 後述 第2章参照
4	本町4丁目	本町4丁目 1949-4、27他	1,030.00	4月26日	遺構・遺物は検出されなかった
5	大原遺跡 第2地点	本町4丁目 1017-1の一部	312.80	5月13日	遺構・遺物は検出されなかった
6	中道遺跡 第33地点	柏町4丁目 2715-7	132.92	6月2日～ 6月17日	確認調査は5月31日に実施 後述 第3章参照
7	城山遺跡 第23地点	柏町3丁目 2632-14	157.94	5月31日	遺構・遺物は検出されなかった
8	城山遺跡 第24地点	柏町3丁目 2659-2、3	277.68	7月6日	遺構・遺物は検出されなかった
9	城山遺跡 第25地点	柏町3丁目 2630-3、2631	127.38	7月21日～ 7月29日	確認調査は7月15日に実施 後述 第4章参照
10	田子山遺跡 第32地点	本町2丁目 1739-20	181.21	8月1日～ 8月4日	確認調査は7月19日に実施 後述 第5章参照
11	中野遺跡 第35地点	柏町1丁目 1518-6	98.27	7月26日	遺構・遺物は検出されなかった
12	城山遺跡 第26地点	柏町3丁目 2618-14他	410.00	8月22日～ 10月14日	確認調査は8月18日に実施 発掘調査は志木市遺跡調査会が実施
13	中道遺跡 第34地点	柏町5丁目 2907-3	270.00	9月21日	遺構・遺物は検出されなかった
14	中野遺跡 第36地点	柏町1丁目 1484-5	160.80	9月22日	遺構・遺物は検出されなかった
15	本町4丁目	本町4丁目 1124-10	45.90	9月22日	遺構・遺物は検出されなかった
16	城山遺跡 第27地点	柏町3丁目 2655-6の一部	371.52	平成7年 2月27日～ 4月7日	確認調査は10月19日、1月30日実施 発掘調査は志木市遺跡調査会が実施

番号	調査地点	所在地	面積 m ²	調査期間	備 考
17	田子山遺跡 第 33 地点	本町 2 丁目 1737-2	298.18	11月11日	遺構・遺物は検出されなかった
18	市場遺跡 第 17 地点	本町 1 丁目 1587-1	56.90	11月14日	遺構・遺物は検出されなかった
19	田子山遺跡 第 34 地点	本町 3 丁目 1844-3	146.07	11月18日	遺構・遺物は検出されなかった
20	本町 4 丁目	本町 4 丁目 1884-8	127.32	11月22日	遺構・遺物は検出されなかった
21	西原大塚遺跡 第 33 地点	幸町 3 丁目 3285-1	284.00	12月 9 日	遺構・遺物は検出されなかった
22	城山遺跡 第 28 地点	柏町 3 丁目 2669-1の一部	233.30	平成 7 年 1 月10日～ 2 月17日	確認調査は12月13日に実施 発掘調査は志木市遺跡調査会が実施
23	本町 4 丁目	本町 4 丁目 1143-17	149.25	12月21日	遺構・遺物は検出されなかった
24	田子山遺跡 第 35 地点	本町 3 丁目 1807-23	172.42	1 月 9 日	遺構・遺物は検出されなかった
25	富上前遺跡 第 12 地点	本町 3 丁目 1860-2	121.79	2 月 1 日	遺構・遺物は検出されなかった
26	田子山遺跡 第 36 地点	本町 2 丁目 1737-1、7、8	201.46	2 月14日	遺構・遺物は検出されなかった
27	田子山遺跡 第 37 地点	本町 2 丁目 1750-4	167.77	2 月27日～ 3 月 9 日	確認調査は 2 月20日に実施 後述 第 6 章参照
28	富士前遺跡 第 13 地点	本町 3 丁目 1865-2、11	171.61	2 月24日	遺構・遺物は検出されなかった
29	本町 4 丁目	本町 4 丁目 1015-43	164.00	3 月 9 日	遺構・遺物は検出されなかった
30	中野遺跡 第 37 地点	柏町 1 丁目 1488-1	286.59	3 月14日	遺構・遺物は検出されなかった
31	中野遺跡 第 35 地点	柏町 5 丁目 2950-18	55.61	3 月20日	遺構・遺物は検出されなかった
32	本町 4 丁目	本町 4 丁目 1907-5、26	125.27	3 月22日	遺構・遺物は検出されなかった
合 計			13,178.02		

第2章 西原大塚遺跡第32地点の調査

第1節 遺跡の概要

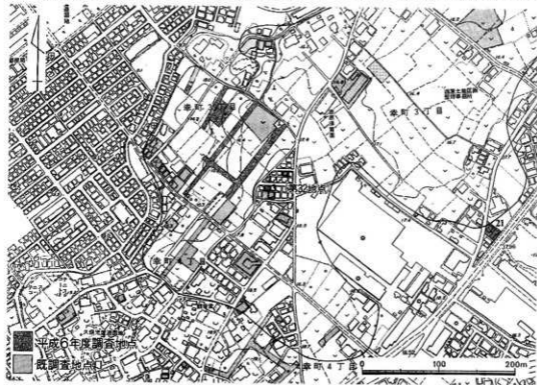
(1) 立地と環境

西原大塚遺跡は、志木市幸町3丁目を中心に所在する市域最大の遺跡である。遺跡は北西に柳瀬川を望む台地上にあり、標高は南西部で約19m、北東部で約16m、柳瀬川の形成した低地で約8mを測る。台地の縁辺は、小規模な湧水地の部分では僅かに凹凸をもつもの、おおむね柳瀬川に沿って平行で、比較的急な傾斜をもつ。遺跡の現況は大部分が畑地であるが、この地区で土地区画整理事業が実施されており、今後、住宅建設を始めとする各種開発行為が予想される。

本遺跡は、昭和48年に第1回目の発掘調査が行われて以来、住宅建設や区画整理事業に伴い、30地点をこす調査が実施されており、旧石器時代、縄文時代前・中期、弥生時代後期、古墳時代前・後期、平安時代、中・近世の複合遺跡であることが知られている。

(2) 発掘調査の経過

発掘調査は、平成6年4月5日から開始した。調査区に合わせて2本のトレンチを設定し、バックホーを使用して表土を剥ぎながら遺構確認作業を行った。その結果、調査区北側に住居跡と思わ



第3図 周辺の地形と調査地点 (1/5000)

れる掘り込みを検出したが、調査区が狭小で調査が困難なため、残土を調査区外に出すこととした。

6日には遺構確認作業を続行し、検出された遺構を弥生時代45号住居跡(45Y)として掘り始める。12日には炉跡や主柱穴の一部を確認、また、土層図の作成を行う。13日には45Yに切られて新たな住居跡を検出、47号住居跡(47Y)として調査を実施し、これらの写真撮影・平面図の作成を行った。14日には断面図の作成・全測図への記入を行い、埋め戻しを残し調査を終了した。



第4図 遺構分布図
(1/300)

第2節 検出された遺構と遺物

45号住居跡(第5図)

〔住居構造〕住居北東半は調査区外にあり、また、47号住居跡を切る。(平面形)隅丸長方形と思われる。(規模)不明×6.94m。(壁高)45cm前後を測り、急斜に立ち上がる。(壁溝)調査できた部分では全周する。上幅15~25cm、下幅5~10cm、深さ6~11cmを測る。(床面)壁際を除いてよく硬化している。(炉跡)住居中央から北西に偏って位置する。95×105cmの略方形を呈し、深さ15cmの地床炉である。炉東側が55×80cmの範囲で焼けている。炉上には礫がみられた。(柱穴)南・西コーナー部に2本検出された。主柱は4本となろう。(覆土)壁際から住居中央にかけてみられる4層はロームの再堆積を思わせる土層で、住居の埋め戻しが想定される。

〔遺物〕床面上・覆土中から僅かに出土した。

〔時期〕弥生時代後期。

45号住居跡出土遺物(第6図1~7、第7図9~19)

壺形土器(1・2・9・17・18)

1は口径13.3cmを測る。頸部は直立きみで、口縁部は僅かに内湾しながら開く。内外面は磨かれるがハケ目痕を残す。口縁部外面は横ナデされる。西コーナー部付近の床面上の出土。

2は小型壺の底部。底径3.6cmを測り、外面には僅かにハケ目痕を残す。覆土中の出土。

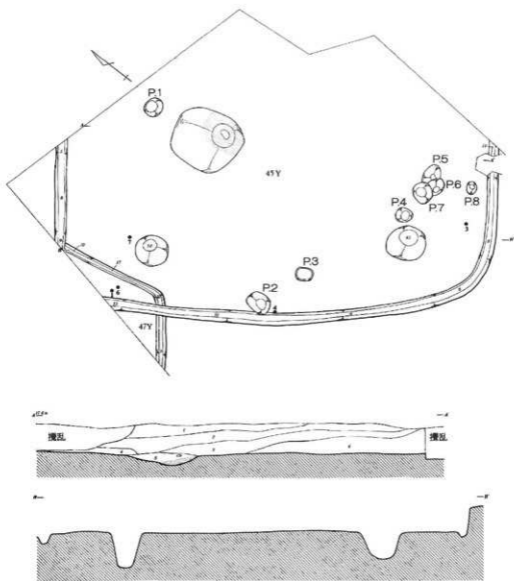
9は折り返し口縁の土器。折り返し部には単筋LRの縄文が羽状に施される。口唇端部にも縄文がみられる。頸部外面には縦位のハケ目痕を残す。内面は横位のハケ整形後磨かれ赤彩される。

17・18は頸部破片。内外面ともていねいに磨かれるが、外面にはハケ目痕を残す。

高環形土器(3~5・10~12)

3は口径14.7cm、脚台径12.7cm、器高10cmを測る。坏部は椀状に内湾して開き、口唇部は内削ぎ状を呈する。脚台部は大きく外湾して開き、裾部はほぼ水平となる。坏部内外面はていねいに磨かれるが、一部ハケ目痕を残す。脚台部外面は磨かれるが、ハケ目痕を残す。内面はハケ整形される。坏部と脚台部の接合はホソ穴状の形態をとる。坏部内外面および脚台部外面は赤彩される。南コーナー部付近の床面上の出土で、坏部1/2、脚台裾部2/3を欠損する。

4は脚台部で、径17.9cmを測るが、1/3程の遺存度からの推定復元のため、多少の誤差はあろう。

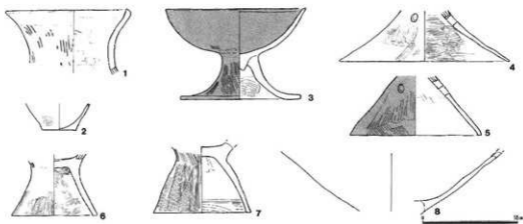


ピット番号	深さ (cm)
1	67.5
2	91
3	71.5
4	70
5	96
6	104
7	91
8	82.5

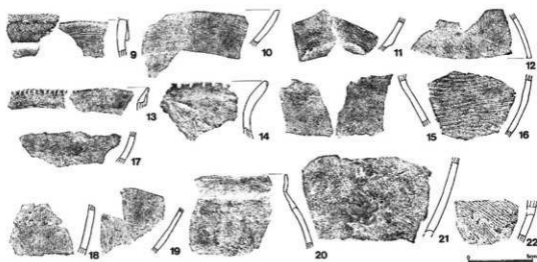
- 1層 ローム粒子を僅かに含む暗褐色土
- 2層 ローム粒子を多く含む暗茶褐色土
- 3層 ローム粒子・焼土粒子を含む黒褐色土
- 4層 ローム粒子を多く含む暗黄褐色土
- 5層 焼土粒子を多く含む暗褐色土



第5図 45・47号住居跡 (1/60)



第6図 45・47号住居跡出土遺物1 (1/4)



第7図 45・47号住居跡出土遺物2 (1/3)

外面は摩耗が著しいが、おそらく磨かれていたと思われる。部分的にハケ目痕を残す。内面は横位にハケ整形される。上位には3孔が穿たれる。南西壁中央直下の床面上の出土。

5は「ハ」字状に開く脚台部で、径13.8cmを測るが、これも1/3程からの推定復元である。外面は摩耗しているがハケ目痕を残し、赤彩されている可能性が大きい。内面はよくナデられている。孔は4孔になろうか。覆土中の出土である。

10は坏部の口縁部破片。おそらく碗状を呈するものと思われ、口唇部は内削ぎ状になる。内外面とも磨かれているが、外面には僅かにハケ目痕を残す。赤彩された痕跡を残す。

11は坏部下端の破片。坏部から脚台部への移行部には段を有する。外面はナデられるが部分的にハケ目痕を残す。

12は脚台部破片。外面には僅かにハケ目痕を残す。

甕形土器（6・7・13～16・19）

6・7は台付甕形土器の脚台部。6は径9cmを測り、外反しながら「ハ」字状に開く。内外面ともハケ目痕を残すが、外面は部分的にナデにより消されている。西コーナー部付近の床面上の出土。7は径10.3cmを測り、僅かに内湾しながら「ハ」字状に開く。内外面とも明瞭にハケ目痕を残す。西側柱穴付近の床面上の出土。

13・14は口縁部破片。13は折り返し口縁で内外面にはハケ目痕を残す。口唇部の刻みはハケ整形に使用した柃目板の小口部分を押捺したと思われる。14は頸部がゆるやかに外湾する。内外面ともナデられ、口唇部には刻みが加えられる。

15は頸部から肩部にかけての破片。外面および内面頸部にはハケ目痕を残す。

16・19は胴部破片。16は粗、19は密なハケ目痕を残す。

47号住居跡（第5図）

〔住居構造〕45号住居跡に切られ、西側の大部分が調査区外にあるため詳細は不明である。（壁高）東側コーナー部だけの検出であり、高さ33cmを測り、急斜に立ち上がる。（壁溝）確認された部分では幅15cm前後、下幅5cm前後、深さ3～12cmを測る。（覆土）ローム粒子・焼土粒子を含む黒褐色土を基調とする。

〔遺物〕覆土中から僅かに出土した。

〔時期〕弥生時代後期。

47号住居跡出土遺物（第6図8、第7図20～22）

壺形土器（20）

広口壺になろうか。頸部は「く」字状に外屈し、口縁部は僅かに内湾しながら開く。内外面とも磨かれており、そのさいのヘラの痕跡を残す。

甕形土器（8・21・22）

8は台付甕形土器の胴下半部。内面には煤が付着する。

21・22は胴部破片。21は外面に煤が付着する。22は外面にハケ目痕を残す。

〔引用・参考文献〕

- 谷井 彪・宮野和明他 1975『西原大塚遺跡発掘調査報告』志木市の文化財第4集
 佐々木保俊・尾形則敏 1985『西原大塚遺跡第3地点 中野遺跡第2地点発掘調査報告書』志木市の文化財第4集
 1987『新都遺跡第2地点 西原大塚遺跡第4地点発掘調査報告書』志木市遺跡調査会調査報告第3集
 1990『志木市遺跡群Ⅱ』志木市の文化財第14集
 佐々木保俊 1989「西原大塚遺跡第6地点の調査」『志木市遺跡群Ⅰ』志木市の文化財第13集
 1991「西原大塚遺跡第11地点の調査」『志木市遺跡群Ⅲ』志木市の文化財第16集

第3章 中道遺跡第33地点の調査

第1節 遺跡の概要

(1) 立地と環境

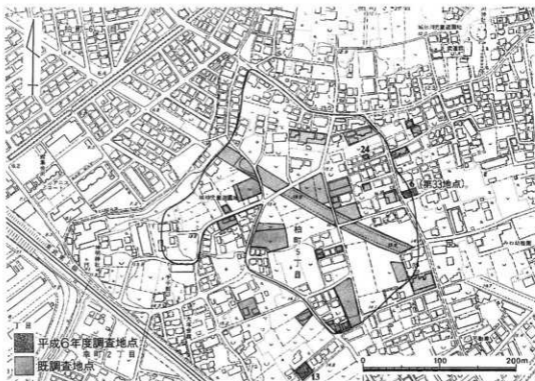
中道遺跡は、志木市柏町5丁目を中心とする遺跡で、北西に柳瀬川を臨む台地上に立地する。遺跡の標高は北端で約13m、南端で約14mを測り、低地との比高差は約7mである。遺跡の現況は、都市計画道路富士見・大原線の開通に伴い、共同住宅建設等の中規模開発が目立ち始め、畑地は激減していると言える。

本遺跡の第1回目の発掘調査は、昭和60年に実施され、以後の調査により、旧石器時代、縄文時代中期、古墳時代中・後期、近世の複合遺跡であることが判明してきた。

(2) 発掘調査の経過

確認調査は、平成6年5月31日に実施した。調査区内に1本のトレンチをほぼ南北方向に設定し、バックホーを使用し表土を剥ぐ。同時に遺構確認作業を行った結果、カマドを有する住居跡を1軒確認した。

人員導入による発掘調査は6月2日から開始した。まず、調査区の整地と細部の遺構確認作業を

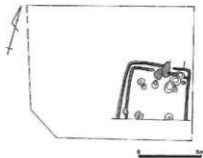


第8図 周辺の地形と調査地点 (1/5000)

行い、同日には遺構の精査に入る。住居跡は、出土土器から古墳時代後期の所産のものと判明した。

3日、床硬化面が確認された。カマド前面の床面からは硬化面が2枚、さらに新たなカマドと壁溝が検出されたことより、本住居跡は拡張住居であるものと考えられた。

6日、遺物出土状態の写真撮影を終了、その後実測を開始し、遺物を取り上げる。17日には、遺構の写真撮影を行い、22日には埋め戻しを終了した。これにより、すべての調査を完了する。



第9図 遺構分布図 (1/300)

第2節 検出された遺構と遺物

17号住居跡 (第10・11図)

〔住居構造〕本住居跡精査時に、住居内側からカマドと溝跡が検出されたことより、本住居跡は拡張住居と考えられる。拡張後の住居跡をAとし、拡張前のものをBとする。

〈17H-A〉(平面形)正方形と思われる。(規模)不明×5.40m。(壁高)17~35cmを測り、ほぼ垂直に立ち上がる。(壁溝)確認できる範囲では、カマド部分を除いて全周する。上幅14~19cm・下幅4~6cm・深さ6~16cmを測る。なお、東壁部分については、Bの一部を共有しているものと考えられる。(床面)壁際を除いてほぼ全面に硬化面を残す。(カマド)北壁中央からやや東に位置し、方位はN-4°-W。長さ123cm・壁への掘り込み38cmを測る。右側の袖部は攪乱により不明であるが、左側袖部にロームの隆起と灰白色粘土が検出されたことから、ロームを馬蹄形に残し、その上部に灰白色粘土を被覆して構築しているものと思われる。(柱穴)各コーナーに4本が確認された。深さ72cm~79cmを測る。(貯蔵穴)カマドの右横に位置し、平面形は隅丸長方形を呈し、56×48cm・深さ42cmを測る。覆土は焼土粒子を多く、炭化物粒子・ローム粒子を含む暗褐色土を基調とする。(覆土)上層はローム粒子・ローム小ブロックを多く、焼土粒子を含む黒褐色土、下層はローム粒子・焼土粒子を多く含む暗茶褐色土を基調とする。

〈17H-B〉(平面形)正方形と思われる。(規模)不明×4.84m(壁溝)確認できる範囲ではカマド部分を除いて全周する。上幅12~19cm・下幅4~6cm、深さ4~19cmを測る。(床面)壁際を除いてほぼ全面硬く踏み固められている。(カマド)北壁のほぼ中央に位置し、方位はN-18°-W。長さ87cm・壁への掘り込み14cmを測る。住居の拡張の際に、大部分が壊されているが、左側の袖部には、ロームの隆起が確認された。(柱穴)主柱穴4本で構成されていると思われるが、南東コーナーの1本は調査区域外で確認できなかった。深さは91~93cmを測る。(貯蔵穴)カマド右横に位置し、平面形は長方形を呈し、82×52cm・深さ56cmを測る。覆土は上層がローム粒子を含む黒褐色土、下層はローム粒子を含む暗黄褐色土を基調とする。

〔遺物〕A住居の貯蔵穴付近から土器が多く出土した。その他として、図示していないが炭化種子

(ヤマモモ) が1点出土した。

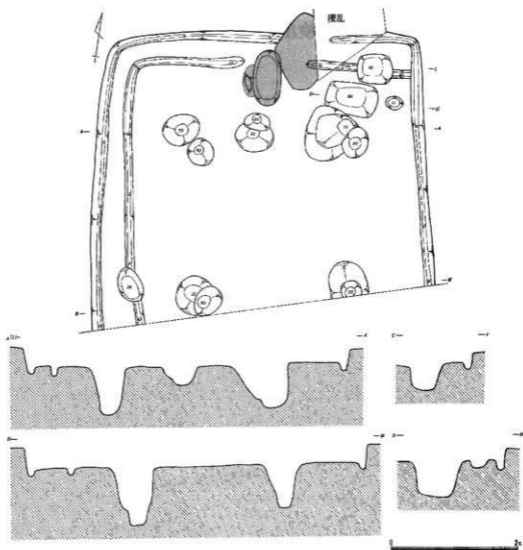
〔時期〕古墳時代後期(鬼高式期)。

〔所見〕覆土中に炭化材・炭化物粒子・焼土粒子を含むことから、焼失住居の可能性がある。

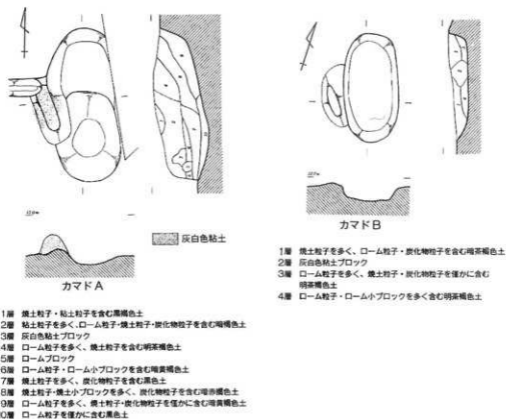
17号住居跡出土遺物(第13~15図)

土師器環形土器(1~5)

1~3はいわゆる比企型環と呼ばれるものである。1は口径12.1cm、器高3.7cmを測る。底部と頸部の境はヘラ削りによる弱い稜として残り、口縁部は短く外反する。口縁部内面には幅1mmの沈線がまわる。胎土中には砂粒・小石を多く含む。口頸部内外面は横ナデ、以下内面はヘラナデが施される。外面には顕著にヘラ削り痕が残る。内面と外面口頸部に顕著な赤彩範囲が確認されるが、



第10図 17号住居跡(1/60)



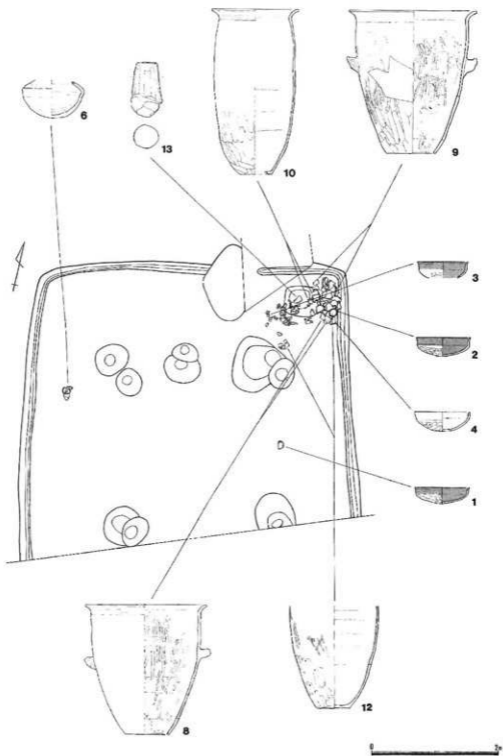
第11図 17号住居跡カマド (1/30)

底部においても全体に赤味を帯び、部分的に赤彩が観察されることから、最初は全面に赤彩を施した後、底部のみヘラ削りによって消されたものと考えられる。住居中央よりやや東壁寄りの床面から約5cm浮いた位置からの出土で、4/5程の遺存度である。

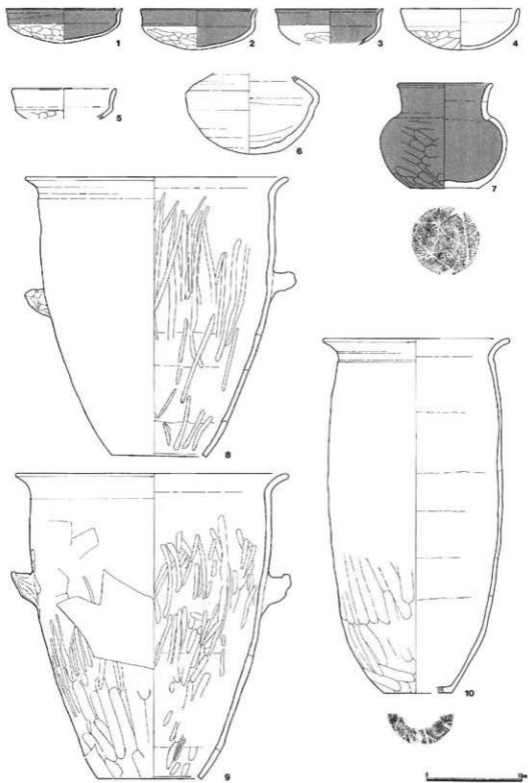
2は口径12.2cm、器高4.3cmを測る。1に比べ、底部と頸部の境の稜がやや強いのが特徴である。胎土中には砂粒を多く含み、中には5mm程の大きな小石もみられる。口頸部内外面は横ナデ、以下内面はヘラナデ、外面は棒状工具による磨き調整が施され、やや光沢を帯びるが、ヘラ削り痕が顕著に残る。赤彩については1と同様に全面が赤味を帯びているが、明かに内面と外面口頸部の赤彩と底部とは区別できる。貯蔵穴右の12の甕形土器の下からの出土で、3/4程の遺存度である。

3は推定口径11.5cmを測る。2よりやや底部と頸部の境の稜が弱い。胎土中には砂粒・小石を多く含む。口頸部内外面は横ナデ、以下内面はヘラナデが施される。外面にはヘラ削り痕が顕著に残る。カマド右のほぼ床面上からの出土で、1/4程の遺存度である。

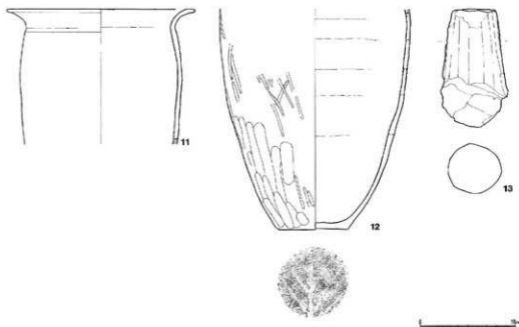
4は口径12.5cm、器高4.4cmを測る無彩の土器である。底部と頸部の境には弱い稜をもち、口頸部は直線的に外傾する。色調は黄褐色を呈し、胎土には砂粒を多く含む。口頸部内外面は横ナデ、以下内面はヘラナデ、外面はヘラ削りされる。貯蔵穴右の床面上からの出土で、完形である。



第12图 17号住居跡遺物出土状態 (1/60)



第13图 17号住居跡出土遺物1 (1/4)



第14図 17号住居跡出土遺物2 (1/4)

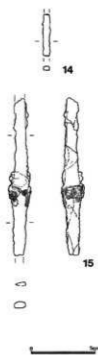
5は推定口径11cmを測る。底部と頸部の境には弱い段をもち、口頸部は直立ぎみに外傾する。色調は茶褐色を呈し、胎土中には金雲母・砂粒が含まれる。口頸部内外面は横ナデ、以下内面はナデ、外面はヘラ削りされる。覆土中の出土で、遺存度1/5程の小破片である。

須恵器壺形土器 (6)

短頸壺であろう。丸底の底部から立ち上がり、肩部で「く」字状に屈曲する。屈曲部には1条の沈線がまわる。色調は淡い青灰色を呈し、胎土中には白色砂粒を含む。外面底部には回転ヘラ削り痕が残る。ロクロ回転は右回転である。北西コーナーに配される柱穴近くの床面から10cm程浮いた位置からの出土で、口縁部を欠損し、以下4/5程遺存する。

土師器壺形土器 (7)

短頸壺であろうか。底部は平底を呈し、ややつぶれた球状の胴部と直立ぎみに立ち上がる口頸部をもつ。口頸部内外面横ナデ、以下内面はヘラナデが施される。外面胴部下半には顕著にヘラ削り痕が残る。底部には木葉痕が観察される。器面全体がぼんやりと赤味を帯びることから、赤彩が施されているものと思われる。カマド前面の覆土中からの出土である。なお、7の実測図は口縁部から胴部上半にかけての破片と以下の破片が接合しなかったため、合成して作成したものである。遺存度は全体で2/3程度である。



第15図 17号住居跡出土遺物3 (1/3)

土師器甕形土器 (8・9)

8・9は胴部中位よりやや上に2つの把手をもつ相似た土器である。両者は筒抜け式の底部から立ち上がり、口縁部に向かって徐々に開き、口縁部は大きく外反する。8は口縁部内外面横ナデ、以下内面はヘラナデ後、縦方向の細長い磨き調整が施される。外面はヘラ削り後、ていねいにナデ(スリップか)られる。貯蔵穴からの出土で、4/5程の遺存度である。

9は8に比べ、やや胴部が長く、細部では把手の先端部分が上方に立ち上がっている。口縁部内外面横ナデ、以下内面はヘラナデ後、やや粗く縦方向の磨き調整が施される。外面はヘラ削り後、ていねいにナデ(スリップ)られ、さらにその後胴部中位以下に内面と同じような縦方向の細長い磨きが施される。貯蔵穴右からの出土で、2/3程の遺存度である。

土師器甕形土器 (10~12)

すべて長胴甕である。10は平底の底部から立ち上がり直線的な胴部に至り、口縁部は外反する。最大径は口縁部に測る。底部には木葉痕が観察される。口縁部内外面は横ナデ、以下内面はヘラナデ、外面は胴部中位以下にはヘラ削り痕が残るが、全体にていねいにナデ(スリップか)られる。貯蔵穴の覆土上層からの出土で、2/3程の遺存度である。

11は口縁部から胴部中位にかけてを1/3程遺存する。口縁部は横ナデ、以下内面はヘラナデ、外面はナデ(スリップか)られる。カマド右の覆土中からの出土である。

12は胴部中位から底部にかけてを1/3程遺存する。底部には木葉痕が観察される。底部内面はヘラナデが施され、外面は底部付近にヘラ削り痕が残るが、全体にナデ(スリップか)られており、その後粗いが縦方向に細長い磨きが施される。貯蔵穴右からの出土である。

土製品 (13)

支脚である。長さ12.5cmを測る。貯蔵穴の覆土上層からの出土である。

鉄製品 (14・15)

14は鉄製の筥被部の破片であろう。残存する長さは3.3cmを測る。

15は刀子である。残存する長さは12.6cmを測る。基部には錆着した木質片が観察される。

〔引用・参考文献〕

佐々木保俊・尾形則敏 1988『中道遺跡発掘調査報告書』志木市遺跡調査会調査報告第5集

尾形則敏 1989「中道遺跡第6地点の調査」『志木市遺跡群Ⅱ』志木市の文化財第13集

1992「中道遺跡第12地点・中道遺跡第13地点の調査」『中道遺跡第12地点 中道遺跡第13地点 田子山遺跡第4地点 田子山遺跡第5地点発掘調査報告書』志木市の文化財第18集

第4章 城山遺跡第25地点の調査

第1節 遺跡の概要

(1) 立地と環境

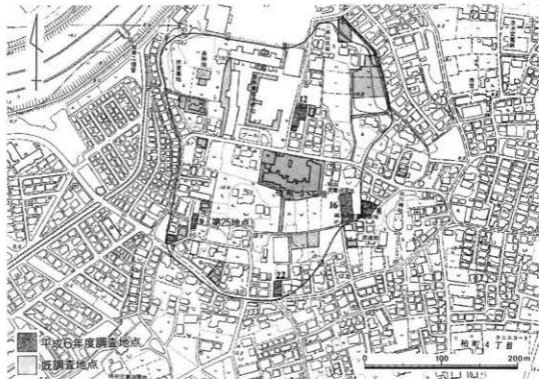
城山遺跡は、志木市柏町3丁目を中心とする遺跡で、北西に柳瀬川を臨む台地上に立地する。遺跡の標高は約12m、低地との比高差は約5mを測る。遺跡の現況は、個人専用住宅の新築・建て替えに加え、アパート・マンション建設等の中規模開発が盛んに行われ、畑地が減少傾向にある。

本遺跡の第1回目の発掘調査は、昭和60年に実施され、以後の調査により、縄文時代前期・中期、弥生時代後期、古墳時代前・中・後期、平安時代、中・近世の複合遺跡であることが判明してきた。

(2) 発掘調査の経過

確認調査は、平成6年7月15日に実施した。調査区の長軸方向に合わせ、中央に1本のトレンチを設定し、バックホーを使用し表土を剥ぐ。同時に遺構確認作業を行った結果、住居跡と思われる遺構を1軒確認した。

そのため、7月21日からは人員導入による発掘調査を実施した。まず、調査区の整地と細部の遺構確認作業を行い、同日には遺構の精査を開始する。遺構は、古墳時代後期の住居跡2軒の他にも



第16図 周辺の地形と調査地点 (1/500)

近世の土坑、近代～現代の溝跡が1本存在することが判明した。そのうち、88号土坑についてはその形態から地下式坑であると考えられる。

27日には、遺構全体の写真撮影を行い、29日に実測を終了する。埋め戻しは8月1日に行った。

第2節 検出された遺構と遺物

(1) 住居跡

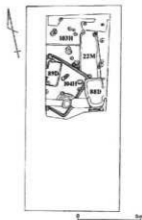
103号住居跡 (第17図)

〔住居構造〕南壁と床面の一部が確認されたのみであり、さらに擾乱による破壊を受けているため詳細は不明である。(壁高)確認できる範囲では、11～18cmを測り、ほぼ垂直に立ち上がる。

〔床面〕部分的に床面と考えられる硬化面が確認された。

〔遺物〕覆土中から土師器変形土器の小破片が数点出土したが、実測できなかった。

〔時期〕古墳時代後期(鬼高式期)か。



第17図 遺構分布図 (1/300)

104号住居跡 (第18図)

〔住居構造〕西側のコーナーは、調査区外にあるものと思われる。

〔平面形〕正方形。(規模) $3.84 \times 3.65\text{m}$ 。(壁高) $5 \sim 24\text{cm}$ を測り、ほぼ垂直に立ち上がる。

〔壁溝〕上幅 $13 \sim 20\text{cm}$ ・下幅 $4 \sim 8\text{cm}$ ・深さ $2 \sim 10\text{cm}$ を測り、確認できる範囲では全周する。

〔床面〕住居中央付近が硬く踏み固められている。(炉跡)住居中央付近の床面がカリカリによく焼けている部分が相当するものと考えられる。平面形は楕円形を呈し、規模は $85 \times 60\text{cm}$ を測る。

〔貯蔵穴〕南コーナーに位置する。平面形は楕円形を呈し、 $78 \times 51\text{cm}$ ・深さ 94cm を測る。北側には高さ 3cm 程で弓状を呈する凸堤が巡っているが、一部は擾乱により破壊されている。(覆土)上層はローム粒子を含む黒褐色土、下層はローム粒子を多く、炭化物粒子を含む明茶褐色土を基調とする。

〔遺物〕覆土中から土器が僅かに出土した。

〔時期〕古墳時代中期(和泉式期)。

104号住居跡出土遺物

須恵器蓋形土器 (1)

口縁部から天井部にかけての破片である。口縁部途中に弱い稜、天井部との境にはやや上外方にのびる明瞭な段を有する。色調は外面が灰白色、内面は暗灰褐色を呈する。天井部外面は回転ヘラ削り、内面は回転ナデ調整が施される。貯蔵穴付近のほぼ床面から出土した。

土師器埴形土器 (2・3)

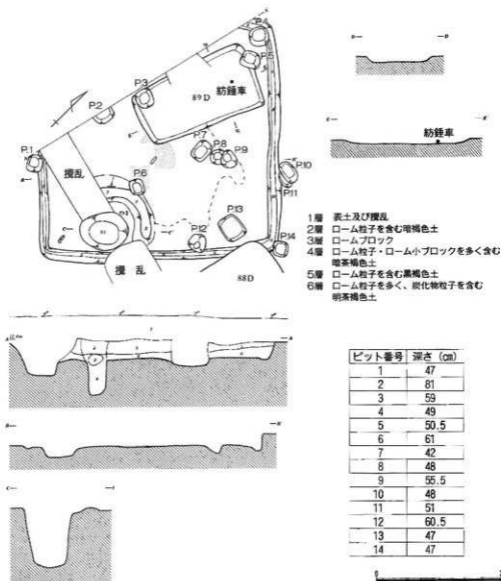
2は口縁部から底部にかけての破片である。体部から頸部に至り「く」字状に屈曲し、口縁部は大きく外反する。口縁部内外面横ナデ、以下外面はヘラ削り、内面はナデられる。赤彩は内外面す

べてに施される。覆土中の出土である。

3は平底の深みのある坑である。内面はヘラナデ後、粗いヘラ磨き調整が施される。外面は口縁部が横ナデ、以下ヘラ削り後、横方向のヘラ磨き調整が施され、光沢を帯びる。赤彩は内外面すべてに施される。覆土中の出土である。なお、3の実測図は、上半部と下半部が接合できなかったため、それぞれを実測した後、合成して作成したものである。

須臾器器台形土器 (4)

大形器台の脚部の破片であろうと思われる。文様は波状文が2段構成で描かれ、その上下を2条



第18図 104号住居跡・88号土坑 (1/60)

の凸帯が区画している。スカシ窓は長方形を呈し、拓本に「→」で示した4ヶ所の位置に穿たれており、上下千鳥状に設定されている。色調は全体に濃い灰褐色を呈し、胎土には細かい白色砂粒を含む。覆土中の出土である。

上師器高環形土器(5)

直線的な脚柱部分の破片である。坏部との境は輪積み部分で剝離している。内面にはヘラ状工具による成形痕が残し、外面は縦方向にヘラ磨きされる。赤彩は外面にのみ施される。覆土中の出土である。

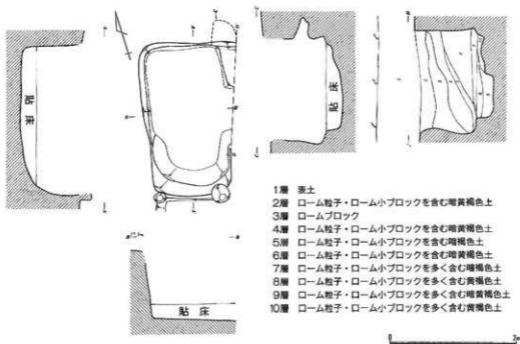
上師器甌形土器(6)

底部穿孔の土器であろうか。ここでは甌形土器として取り扱った。内面はヘラナデが施される。外面は縦方向に粗く磨きが施されるが、器面全体に粘土が薄く貼られているようで、部分的にその粘土が剥落した様子が観察される。貯蔵穴内からの出土で、胴部下半を遺存するのみである。

(2) 土坑

88号土坑(第19図)

〔構造〕地下式坑である。(人口堅坑部)主体部東側の調査区外にあるものと思われる。(主体部)平面形態は224×125cmの長方形を呈する。坑底はほぼ平坦で、壁の立ち上がりは垂直である。天井部までの高さは68cmを測る。北東端に約40cmの横穴状の掘り込みが確認された。(覆土)3層からロームブロックが検出されたことにより、主体部の天井部分が崩落したものと考えられる。7層か



第19図 88号土坑(1/60)

ら下は、貼床状に締まっていた。

〔遺物〕覆土中から陶・磁器が数点出土した。

〔時期〕近世（18世紀後半～19世紀）。

88号土坑出土遺物（第21図7・図版8の1～5）

図版8の1は肥前系の磁器の赤絵付である。18世紀後半の遺物である。

2・3は肥前系の磁器で、2は皿、3は碗である。小片であるため、詳細な時期決定はできないが、18世紀後半～19世紀の遺物であろう。

4は信楽系の壺である。小片であるため、詳細な時期決定はできない。

5は瀬戸系の碗の腰部である。菊花文が施される。19世紀代の遺物であろう。

第21図7は瀬戸系の磁器で、灯明具である。19世紀代の年代が与えられる。

89号土坑（第18図）

〔構造〕104号住居跡を精査中に検出されたため、詳細は不明である。（平面形）長方形。（規模） 1.98×10.4 cm。（深さ）104号住居跡の床面から6cm前後を測る。坑底はほぼ平坦である。（長軸方向）N-21°-E。（覆土）ローム粒子・ローム小ブロックを含む黒褐色土を基調とする。

〔遺物〕土製の紡錘車が1点出土した。

〔時期〕不明。

89号土坑出土遺物（第21図8）

土製の紡錘車である。大形で扁平なもので、表面の仕上げはていねいで、細かい磨きが施される。

（3）溝跡

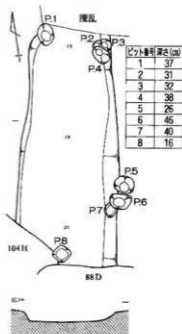
22号溝跡（第20図）

〔構造〕N-12°-Eの走向角度をもつ。北側は攪乱を受け、南側は104号住居跡、88土坑に切られているため、全容は不明であるが、一応溝跡として取り扱う。上幅130～158cm、下幅112～130cm、深さ15～21cmを測り、溝底はほぼ平坦で、断面形は浅い皿状を呈する。（覆土）ローム粒子・ローム小ブロックを含む暗褐色土を基調とする。

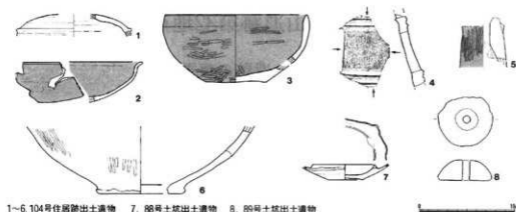
〔遺物〕覆土中から僅かに出土した。

〔時期〕近代～現代。

〔所見〕遺物については、小破片のため図示していないが、化学コバルトによる染付磁器碗やガラス小ビンなどが出土している。そのため、本遺構は近代～現代にかけての時期に比定できるものと考えられる。



第20図 22号溝跡（1/60）



1~6. 104号住居跡出土遺物 7. 88号土坑出土遺物 8. 89号土坑出土遺物

第21図 住居跡・土坑出土遺物(1/4)

〔引用・参考文献〕

- 志木市史編さん室 1984『志木市史 原始・古代資料編』
 1986『志木市史 中世資料編』
 1987『志木市史 近世資料編Ⅲ』
 1990『志木市史 通史編 上』
- 佐々木保俊・尾形則敏 1988『城山遺跡発掘調査報告書』志木市遺跡調査会調査報告第4集
 佐々木保俊 1987『城山遺跡長勝院地点発掘調査報告書』志木市の文化財第11集
 1992『城山遺跡第11地点の調査』『志木市遺跡群Ⅳ』志木市の文化財第17集
- 尾形則敏 1989『城山遺跡第4地点の調査』『志木市遺跡群Ⅰ』志木市の文化財第13集
 1991『城山遺跡第7・8地点の調査』『志木市遺跡群Ⅲ』志木市の文化財第16集
 1991『城山遺跡第6地点の調査』『西原大塚遺跡第7地点 新郷遺跡第3地点 中野遺跡第7地点 中野遺跡第8地点 城山遺跡第6地点』志木市の文化財第15集
 1995『城山遺跡第20地点の調査』『志木市遺跡群Ⅵ』志木市の文化財第21集

第5章 田子山遺跡第32地点の調査

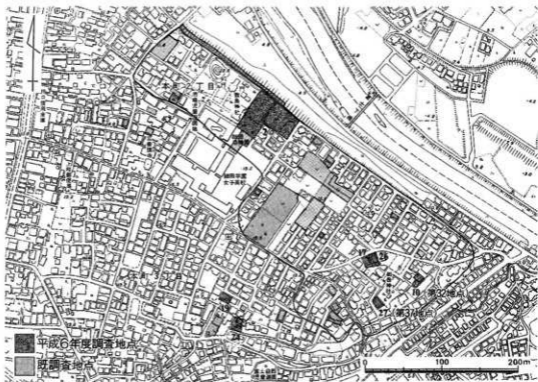
第1節 遺跡の概要

(1) 立地と環境

田子山遺跡は、志木市本町2丁目を中心とする遺跡で、北東方向に新河岸川を臨む台地上に立地する。遺跡の標高は約15m、低地との比高差は約10mを測り、台地から低地への移行は際立った崖を形成している。遺跡の現況は、市内でも特に、古くから密集した個人住宅地であったため、畑地は極めて少ない。発掘調査は、個人住宅建設・アパート建設等の小規模開発に伴うものが大多数を占める。

本遺跡の第1回目の発掘調査は、昭和63年に実施され、以後の調査により、縄文時代早期・中期、弥生時代後期、古墳時代後期、平安時代、近世の複合遺跡であることが判明している。

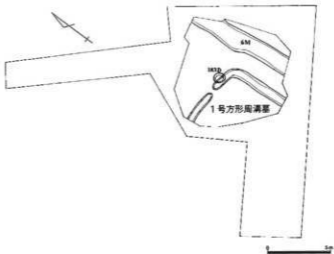
最近では、平成6年度実施の第31地点の調査により、縄文時代中期の住居跡1軒、弥生時代後期の住居跡17軒、奈良時代の住居跡1軒、平安時代の住居跡5軒、ローム探掘遺構（富士塚関連遺構と考えられる）2ヶ所などが検出された。その中でも、弥生時代後期の住居跡（21号住居跡）から、大量の炭化したイネ・アワ・ダイズ等が出土したことから、敷島神社境内にある田子山富士の築造に使用された大量の土壌を採掘したと考えられる遺構が検出されたことは特筆すべきと言える。



第22図 周辺の地形と調査地点 (1/5000)

(2) 発掘調査の経過

確認調査は、平成6年7月19日に実施した。調査区内に2本のトレンチを設定し、バックホーで表土を削ぐ。同時に遺構確認作業を行った結果、溝跡と思われる遺構を数本確認したため、継続して、プランを確認しながら表土を削ぐ。残土については、搬出作業が不可能であると判断し、調査区内でその処理を行うことにした。作業は、19日と29日の2日間で終了した。



第23図 遺構分布図 (1/300)

人員導入による発掘調査は、8月1日から開始した。まず、調査区の整備と細部の遺構確認作業を行った。その結果、確認調査により確認された遺構は、南北に延びる1本の溝跡(6M)と「く」字状を呈する1基の方形周溝墓と考えられた。同日、6Mの精査を開始する。

3日には、方形周溝墓の精査を開始する。また、縄文時代早期の土坑(183D)が新たに1基確認された。

4日には、すべての実測・写真撮影が終了、12日には埋め戻しが完了した。

第2節 検出された遺構と遺物

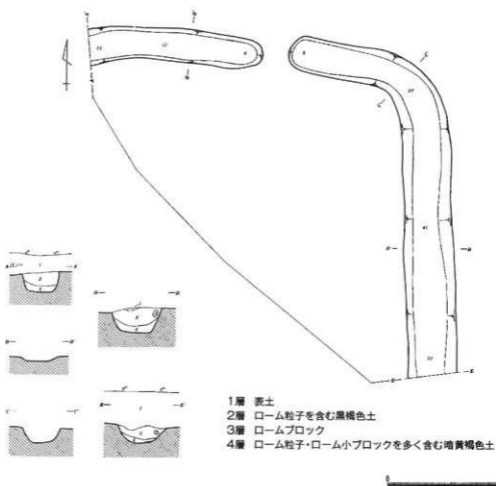
(1) 方形周溝墓

1号方形周溝墓 (第24図)

〔構造〕 確認された範囲では、「く」字状を呈する溝状遺構であるが、ここでは一応方形周溝墓として取り扱った。北溝と東溝の部分的な確認であったが、方形周溝墓の北東コーナーに相当する部分であろうと考えられる。(北溝)中央付近と思われる部分で一旦途切れ、ブリッジ状を呈する。長さは5.5m、上幅45～60cm・下幅38～44cm、深さ5～27cmを測る。溝底は平坦で、壁は急に立ち上がり、断面形は逆台形状を呈する。(東溝)確認できた部分の長さは5m、上幅70～80cm・下幅40～53cm、深さ27～41cmを測る。溝底はほぼ平坦で、壁は急に立ち上がり、断面形は逆台形状を呈する。(覆土)上層がローム粒子を含む黒褐色土、下層がローム粒子、ローム小ブロックを多く含む暗黄褐色土を基調とする。

〔遺物〕 縄文時代の土器が多く、該期の遺物は出土しなかった。

〔時期〕 現段階では、弥生時代末葉～古墳時代初頭の所産のものとする。



第24図 1号方形周溝墓 (1/60)

(2) 土坑

183号土坑 (第25図)

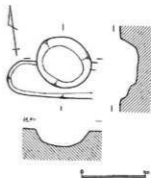
〔構造〕1号方形周溝墓に切られる。(平面形)円形。(規模)90×78cm。(深さ)28cm前後を測る。坑底はほぼ平坦で、壁は急に立ち上がる。(長軸方位)N-47°-W。(覆土)ローム粒子を多く、焼土粒子を含む明茶褐色土を基調とする。

〔遺物〕覆土中から土器が数点出土した。

〔時期〕縄文時代早期前葉。

183号土坑出土遺物 (第27図)

1～4は縄文時代早期前葉の撚糸文系土器である。撚糸文はすべて縦位に施文される。3の撚糸文は列点状に間隔が粗いものである。



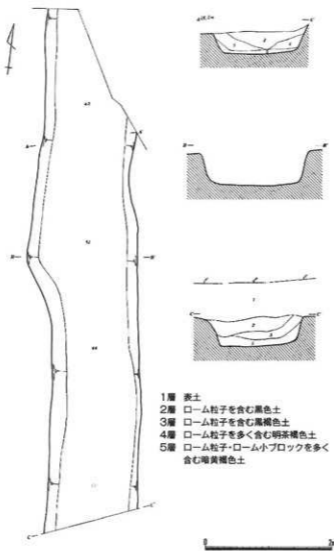
第25図 183号土坑 (1/60)

(3) 遺跡

6号溝跡 (第26図)

〔構造〕 ほぼ南北に走向する。確認できる範囲での長さは8.3cm、上幅138～173cm、下幅108～138cm、深さ41～51cmを測る。溝底はほぼ平坦で、断面形は東側に比べ、西側の立ち上がりがややゆるやかな逆台形を呈する。(覆土) 上層はローム粒子を含む黒色土及び黒褐色土、下層はローム粒子・ローム小ブロックを多く含む暗褐色土を基調とする。

〔遺物〕 縄文時代の土器が多く、該期の遺物は出土しなかった。



第26図 6号溝跡 (1/60)

(4) 遺構外出土遺物 (第27図)

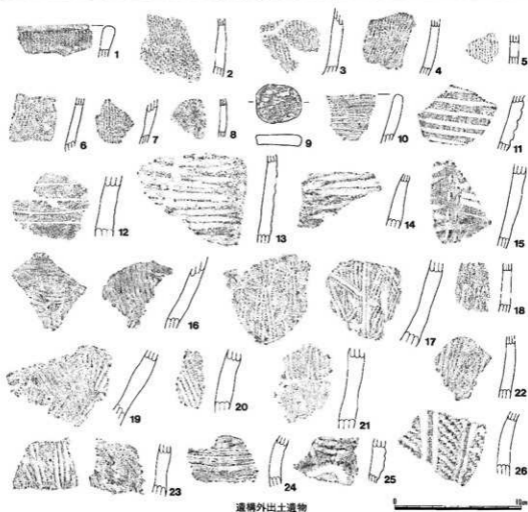
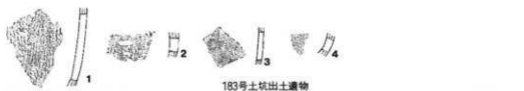
縄文時代の土器が検出されている。時代的には早期前葉～中期後葉にかけての土器であり、1～6群に分類された。

第1群土器 早期前葉の撚糸文系土器 (1～9)

1はやや肥厚する口唇部をもつ。9は土錘である。

第2群土器 早期中葉の沈線文系土器 (10～15)

10は細沈線文により、横位あるいはやや斜位に施文される。11・12は平行沈線文が横位に施され



第27図 183号土坑・遺構外出土遺物 (1/3)

る。13・14は太沈線文により横位に施され、15には刺突列が縦位に加えられる。

第3群土器 早期後葉の条痕文系土器（16～23）

胎土中に繊維を含む条痕文が施された土器を一括した。

第4群土器 前期後葉の竹管文系土器（24）

横位の沈線施文を基本とする。

第5群土器 中期後葉の加曾利E式土器（25・26）

26は隆帯と幅広の沈線による楕円区画文が施される。27は単節LRの地文に沈線による懸垂文が施される。

〔引用・参考文献〕

- 佐々木保俊 1990「田子山遺跡第1地点の調査」『志木市遺跡群Ⅱ』志木市の文化財第14集
 1992「田子山遺跡第6・7地点の調査」『志木市遺跡群Ⅳ』志木市の文化財第17集
 1992「田子山遺跡第4・5地点の調査」『中道遺跡第12地点 中道遺跡第13地点 田子山遺跡第4地点 田子山遺跡第5地点発掘調査報告書』志木市の文化財第18集
 尾形則敏 1995「田子山遺跡第29地点の調査」『志木市遺跡群Ⅵ』志木市の文化財第21集

第6章 田子山遺跡第37地点の調査

第1節 遺跡の概要

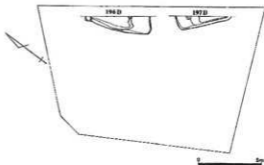
(1) 立地と環境

第5章 田子山遺跡第32地点の調査(26ページ)を参照。

(2) 発掘調査の経過

確認調査は、平成7年2月20日に実施した。調査区長軸方向に2本のトレンチを設定し、バックホーで表土を剥ぐ。同時に遺構確認作業を行った結果、調査区東端の2ヶ所で黒い落ち込みを確認した。しかし、その日は遺構の有無を確認するに留め、一旦埋め戻しを行う。

27日、再度バックホーを使用し、遺構を確認しながら表土を剥ぎ、3月2日から人員導入により発掘調査を開始する。まず、調査区の整備と細部の遺構確認作業を行い、午後からは調査区東端の2基の掘り込みの精査を開始する。9日には2基の掘り込みを掘り終え、写真撮影・実測を終了する。本遺構については、当初、2軒の住居跡と考えていたが、精査の結果、その構造上の特徴が住居跡とは異なるために2基の土坑として取り扱うことにした。11日には埋め戻しを行い、すべての調査を完了する。



第28図 遺構分布図 (1/300)

第2節 検出された遺構と遺物

(1) 土坑

196号土坑 (第29図)

〔構造〕 大部分が調査区外にあるものと思われ、詳細は不明である。確認できる範囲では、坑底は南側から北側にゆるやかに下がっており、深さは浅いところで12cm、最も深いところで93cmを測る。
〔覆土〕 上層はローム粒子を僅かに含む黒褐色土及び黒色土、中層はローム粒子を含む暗茶褐色土、下層はローム粒子を多く含む明茶褐色土を基調とする。

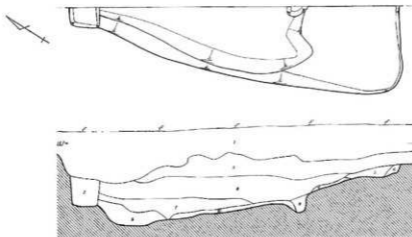
〔遺物〕 縄文時代の土器が多く、最新の遺物としては平安時代の須恵器が2点出土した。

〔時期〕 平安時代か。

196号土坑出土遺物 (第30図)

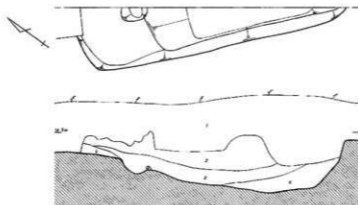
1、2とも須恵器環形土器である。

1は推定口径13.5cm・底径5.6cm・高さ5.4cmを測る。ロクロ回転は右回転で、底部には回転糸



196号土坑

- | | |
|-------------------------|----------------------------|
| 1層 表土及び攪乱 | 6層 ローム粒子・ローム小ブロックを含む暗黄褐色土 |
| 2層 ローム粒子を含む暗褐色土(後世のピット) | 7層 ローム粒子を含む暗茶褐色土 |
| 3層 ローム粒子を僅かに含む黒褐色土 | 8層 ローム粒子を含む黒色土 |
| 4層 ローム粒子を僅かに含む黒色土 | 9層 ローム粒子を多く含む明茶褐色土 |
| 5層 ローム粒子を含む暗茶褐色土 | 10層 ローム粒子・ローム小ブロックを含む暗黄褐色土 |



197号土坑

- | |
|---------------------------|
| 1層 表土及び攪乱 |
| 2層 ローム粒子を僅かに含む黒色土 |
| 3層 ローム粒子を含む暗茶褐色土 |
| 4層 ロームブロック |
| 5層 ローム粒子・ローム小ブロックを含む暗黄褐色土 |
| 6層 ローム粒子を多く含む明茶褐色土 |



り痕が残る。色調は淡灰褐色を呈する。覆土中の出土で、1/4程の遺存度である。

2は底部のみの破片で、底径6.2cmを測る。底部には回転糸切り痕が残る。色調は淡灰褐色を呈する。



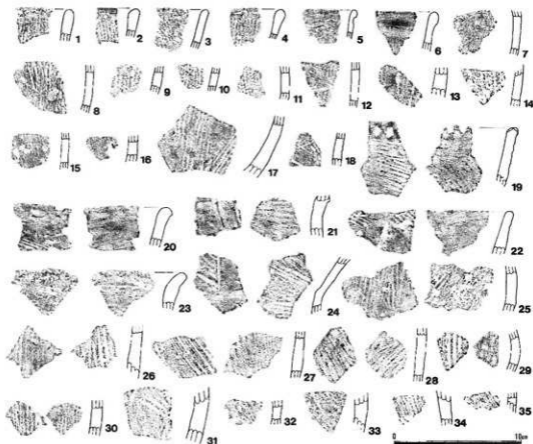
第30図 196号土坑出土遺物 (1/4)

197号土坑 (第29図)

〔構造〕 196号土坑同様に大部分が調査区外にあるものと思われ、詳細は不明である。確認できる範囲では、坑底は北側から南側にゆるやかに下がっており、深さは浅いところで17cm、最も深いところで79cmを測る。(覆土) 上層はローム粒子を僅かに含む黒色土、中層はローム粒子を含む暗茶褐色、下層はローム粒子を多く含む明茶褐色土を基調とする。

〔遺物〕 縄文時代の上器が多く、該期の遺物は出土しなかった。

〔時期〕 不明。



第31図 遺構外出土遺物 (1/3)

(2) 遺構外出土遺物 (第31図)

縄文時代の土器が検出されている。時代的には早期前葉～末葉かけての土器であり、1～3群に分類された。

第1群土器 早期前葉の燃糸文系土器 (1～17)

1～6は口縁部破片である。1～3は口唇部があまり肥厚せず、燃糸文はやや斜方向に施される。4～6はやや肥厚外反する口唇部を特徴とし、燃糸文は全体に縦方向に弱い施文である。

第2群土器 早期中葉の沈線文系土器 (18)

平行細線文に刺突文がサンドイッチ状に挟まれている文様である。

第3群土器 早期後葉の条痕文系土器 (19～35)

胎土中に繊維を含み、条痕文が施された土器を一括した。19～30は内外面に条痕文が施される。19の口唇部は交互押捺により小波状を呈し、21は細隆起線の交叉部分に刺突文が施される。

第7章 ま と め

平成6年度は、個人住宅建設に伴う発掘調査が5地点と今までの中で最高の件数にのぼった。

以下、発掘調査を実施した5地点について、若干のまとめを行うものとする。

西原大塚遺跡第32地点 2軒の住居跡が重複して検出された。新旧関係は47号住居跡→45号住居跡である。遺物としては、45号住居跡から、壺形土器・高環形土器・台付甕形土器が出土している。遺物の時期については、特に、4・5の高環形土器がいわゆる東海系と称される土器であり、廻間編年Ⅱ式に比定されることから、弥生時代後期後半に位置付けられるものと考えられる。

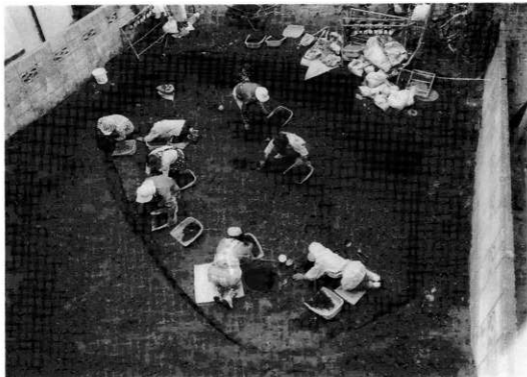
中道遺跡第33地点 古墳時代後期の住居跡が1軒検出された。遺物としては、土師器環形土器・壺形土器・甗形土器・甕形土器、須恵器壺形土器が出土した。特に、1～3のいわゆる比金型坏については、口径が12cm前後を測ることから、城山Ⅴ期でも新しい段階に比定される。7世紀前葉から中葉の所産であろう。なお、城山編年については、Ⅰ～Ⅵ期の7期に分類され、最新のⅥ期は7世紀第2四半期に比定されてきたが、その後の資料の増加により、7世紀後半まで下る可能性がでてきた。新たな編年の再編成の時期にきているといえる。

城山遺跡第25地点 狭小な面積にもかかわらず、遺構が密集して検出された。ここでは、104号住居跡出土土器について若干触れることにする。この住居跡からは、土師器埴形土器・高環形土器・甗形土器・須恵器甕形土器・器台形土器が出土している。まず、土師器は、埴形土器が平底の底部を基本に3の土器には外面にヘラ磨き調整が施され、高環形土器は脚柱部をもつ長脚のものであることから、5世紀前葉～中葉の年代観が与えられる。須恵器については、器台形土器が、比較的均等な波状文が施文されることや細部に精巧な技法がみられること、また、甕形土器は天井部と口縁部の境にやや上外方にのびる明瞭な段を有していることから判断して、陶器編年の初期段階の須恵器に比定できる可能性がある。

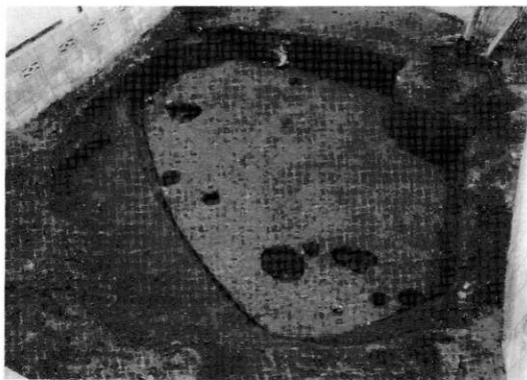
田子山遺跡第32・37地点 第32地点からは、本遺跡では初めて方形周溝墓と考えられる遺構が確認された。当地区での弥生時代の遺構・遺物としては、平成6年度に実施された第31地点の調査に注目される。この調査では該期の住居跡が17軒検出され、中でも21号住居跡から、大量の炭化米・炭化種子・豆類、そして弥生町式土器が一括で出土した。今回検出された遺構は、該期の遺物が伴出しなかったため、現段階では形態上だけでの確認に留め、今後の調査に期待したいが、仮に方形周溝墓であるならば、こうした墓域は、田子山遺跡の東部の斜面に近い部分に展開しているものと考えられる。

第37地点からは、2基の土坑が検出され、そのうち196号土坑からは最新の遺物として、須恵器環形土器が2点出土している。1の土器は底部に回転糸切り痕を残し、底径が口径の1/2を下回り、体部下端に膨らみをもち、口縁部が僅かに外反するものである。9世紀末～10世紀前半の所産であろうか。また、遺構については、大部分が北側調査区外にあるものと思われ、今回の遺構は構造上、住居跡とは異なるというだけで土坑として取り扱っただけであるため、やはりこれについても今後の調査の課題としたい。なお、調査区北側には天保2年の創立と伝えられる御獄神社が隣接している。

图 版



発掘調査風景



45・47号住居跡



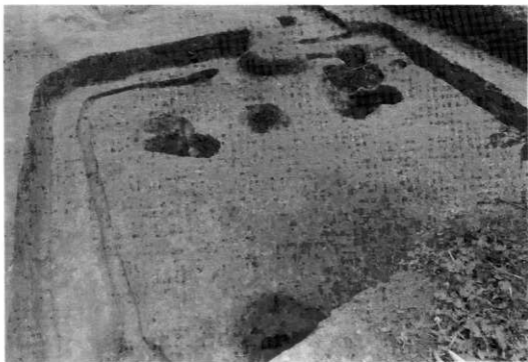


調査区近景



発掘調査風景

図版四 中道遺跡第三十三地点



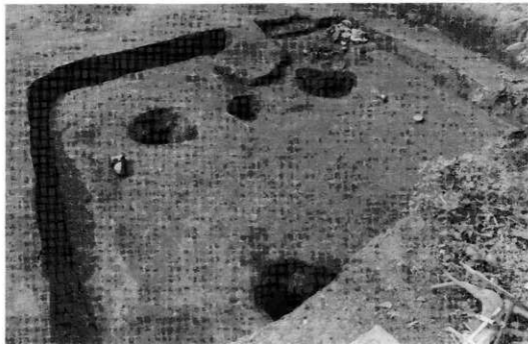
カマド



貯蔵穴

17号住居跡

図版五 中道遺跡第三十三地点

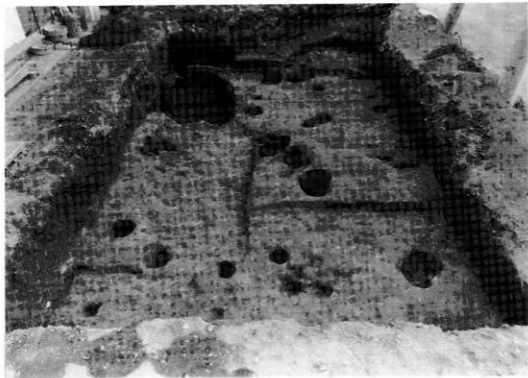


17号住居跡遺物出土状態

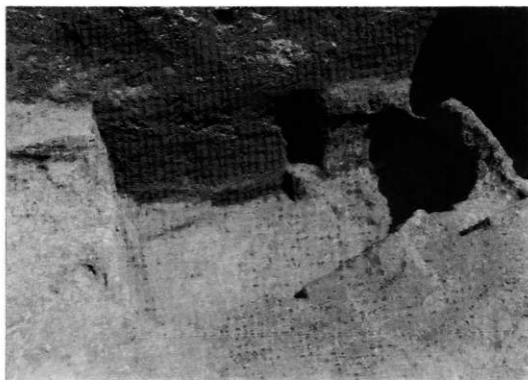
図版六 中道遺跡第三十三地点



17号住居跡出土遺物



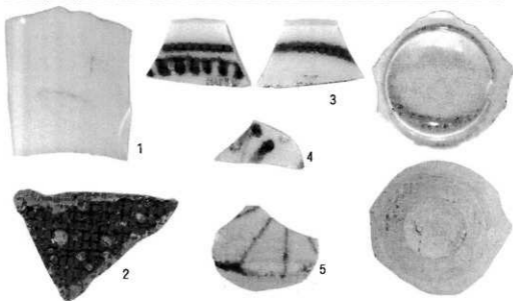
調査区全景



88号土坑



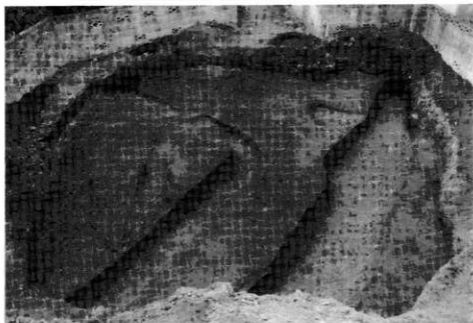
104号住居跡出土遺物



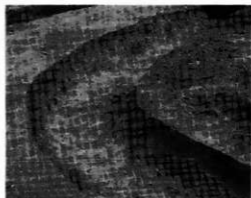
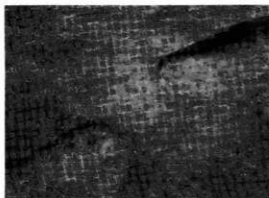
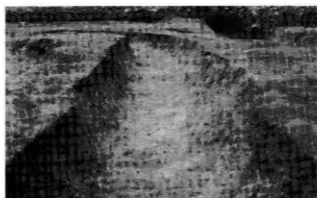
88号土坑出土遺物



88号土坑出土遺物



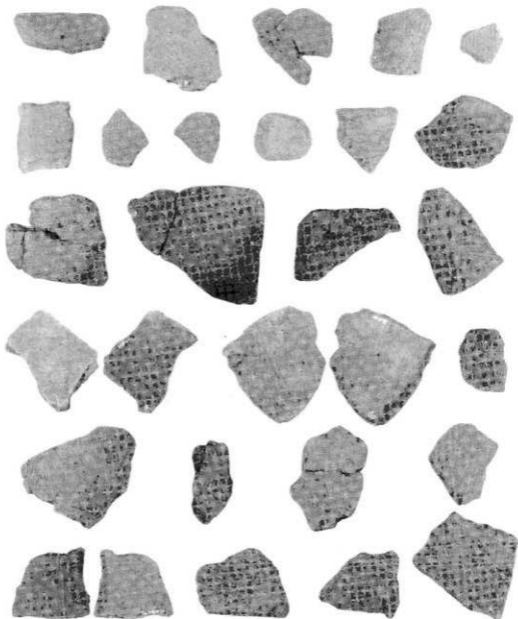
調査区全景



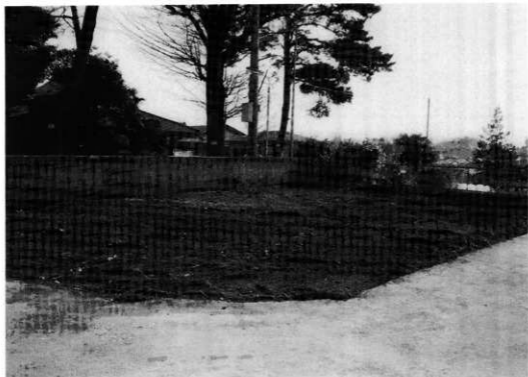
1号方形周溝墓



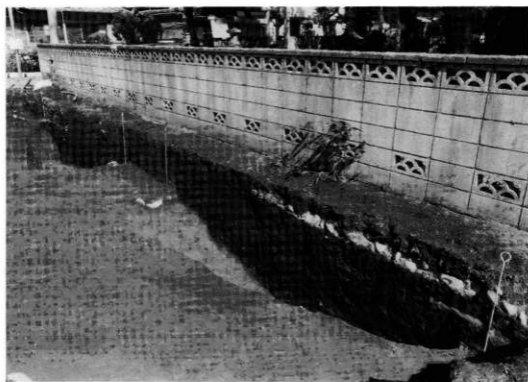
183号土坑出土遺物



遺構外出上遺物



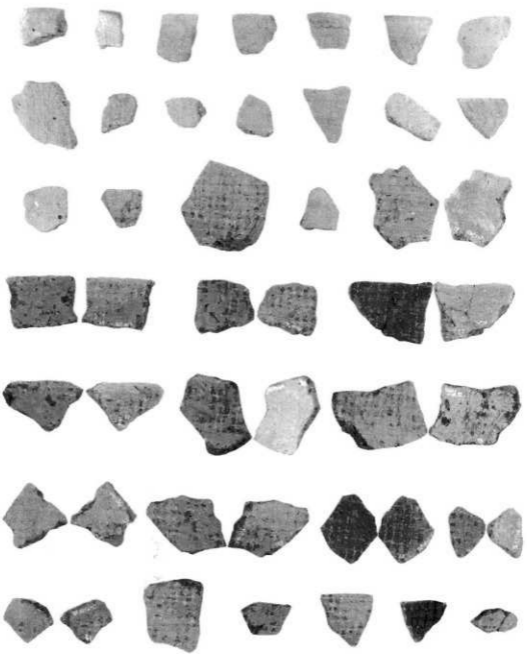
調査区近景



196・197号土坑



196号土坑出土遺物



遺構外出土遺物

報告書抄録

ふりがな	しきしいせきぐん							
書名	志木市遺跡群 Ⅳ							
副書名						巻次		
シリーズ名	志木市の文化財					巻次	第23集	
編著者名	尾形 則敏							
編集機関	埼玉県志木市教育委員会							
所在地	〒353 埼玉県志木市中宗岡1丁目1番1号 TEL 0484 (73) 1111							
発行年月日	1996(平成8)年3月29日							
ふりがな	ふりがな	コ ー ド		北 緯	東 経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	(°′″)	(°′″)		(㎡)	
西原大塚遺跡	志木市幸町 3丁目3133-9	11228	007	35° 49′ 16″	139° 34′ 00″	19940406 ～ 19940413	60.11	個人 専用住宅
中道遺跡	志木市柏町 4丁目2715-7	11228	005	35° 49′ 34″	139° 34′ 17″	19940602 ～ 19940617	132.92	個人 専用住宅
城山遺跡	志木市柏町 3丁目2630-3他	11228	003	35° 49′ 45″	139° 34′ 18″	19940721 ～ 19940729	127.38	個人 専用住宅
田子山遺跡 (第32地点)	志木市本町 2丁目1739-20	11228	010	35° 49′ 38″	139° 35′ 10″	19940801 ～ 19940804	181.21	個人 専用住宅
田子山遺跡 (第37地点)	志木市本町 2丁目1750-4	11228	010	35° 49′ 38″	139° 35′ 10″	19950227 ～ 19940309	167.77	個人 専用住宅
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
西原大塚遺跡	集落	弥生時代末～古墳時代初期	住居跡	2軒	土器			
中道遺跡	集落	古墳時代後期	住居跡	1軒	土師器 須恵器			
城山遺跡	集落	古墳時代後期 近世	住居跡 土坑	2軒 1基	土師器 須恵器 陶・磁器小片			
田子山遺跡 (第32地点)	集落	平安時代か	土坑	2基	須恵器環 縄文土器			
田子山遺跡 (第37地点)	集落 墓跡	縄文時代早期 弥生時代末～古墳時代初期	土坑 方形周溝墓	1基 1基	縄文土器 なし			

志木市の文化財 第23集

志木市遺跡群 Ⅵ

発行 埼玉県志木市教育委員会
埼玉県志木市中宗岡1丁目1番1号

発行日 1996(平成8)年3月29日

印刷 梅田印刷株式会社